

事業の概要

(1) 教育方針

① 生徒受け入れ方針

従来から「我が子として入学から一生涯を」の教育理念の下、インクルーシブで少人数の学習集団に、体験的・総合的な学習活動を取り入れての手厚い学習支援を実践して来ている。その成果は、福祉科の介護福祉士の合格率の向上や普通科の地域社会との連携や貢献、美術科の進学実績等にも現れていると評価する。永年のこの教育方針は、地域社会から一定の評価と理解が得られているので今後も大切にし、より一層信頼度を高めていく。

② 教学 情報公開（監査・評価・改善等）の取組み

③ 教育課程編成

教育方針具現化（少人数でわかる授業）のための教育課程の編成方針。

1年生には、習熟度別授業を取り入れクラス数を増加して少人数化を図る。

2年生からは、普通科にコース制・美術科には専攻別を取り入れて少人数化を図る。

④ 海外研修旅行について

本校生徒の教場は、「実体験を伴う教室を含めたあらゆるところが学ぶ場所である」の教育方針下で、姉妹校交流とホームステイを中心とした海外研修旅行は従来から大切にしてきたが、前年に続き令和3年度も全世界で猛威を振るった新型コロナウイルスの感染防止のため3科共に中断を余儀なくされた。

<普通科>平成7年から実施している海外旅行は、平成12年よりホームステイ及び現地高校生との交流（アクティブ）取り入れた研修旅行へ方向転換。姉妹校提携等の国際交流推進の観点のみならず、現地での交流は、生徒達に積極さと意思伝達の大切さを体得させ、達成感と共に自信醸成にも大きく寄与していて、その後の生徒達の行動にも大きな変化が見られる。平成24年に提携した姉妹校の国立彰化女子高級中学校との交流と研修は、研修旅行の目的達成の観点からも大切にし、1泊となっているホームステイを2泊に戻したい。

<福祉科>福祉に関する専門的な研修を求めて先進国（北欧）での研修をしたいという生徒達の強い要望で、法人としても研究を重ねデンマークのノアフン国民高等学校（千葉忠夫氏が日欧文化交流学院として開校）及びノアフン高等学校での研修旅行を令和元年11月に実施することが出来た。福祉施設見学や高校生との交流、デンマークの福祉に対する考え方等の講義を受け良い研修が出来た。今後は本校の生徒数の関係もあり隔年実施としている。

<美術科>長年続けたパリへの研修旅行は、テロ事件で中断して5年、その間ヨーロッパの治安も向上して来たのを受けて令和元年11月福祉科と同時に復活させたがコロナの関係で令和2年に続き今年度も実施を見送った。

⑤ 計画検討中の施設設備について

教育環境の整備は最重要課題と捉え、法人の安定的な経営を睨みながら70周年記念事業としても取り組み福祉科教室の改築などの充実に努めた。重点目標としている校地の拡充及び体育館の改築は、80周年記念事業に位置づけられているが今後は、周年事業に固執することなく、総合的な見地から取り組みたい。その他の施設設備は、延命化を計りながら取り組む。

(3) 支援活動

① P T A ・ 振興会

P T A ・ 振興会総会には、毎年 50% を超す会員の皆さんが参加する状況が定着していた。公開講座や合唱フェスティバル・強歩大会等生徒の学習活動にも当事者として参加することで、学校の方針や状況をより深く理解し、建設的な提言を頂いてきた。健全な学校づくりのためにも大変貴重であり、本年も活発な活動を期待したがコロナ禍のため昨年に続き中止の活動が多く残念であった。

振興会は、卒業生の保護者が中心となり本校の教育環境を整備することを目的に結成された組織である。校舎の改築や校地の拡充のための資金を計画的に積み立てており、法人としてもここからの寄付は大変ありがたい。

② 同窓会活動

同窓会総会等活動への参加者数は多くは無いが、日頃学校を訪れる卒業生は多く母校を想う気持ちの強い卒業生が多い。このような卒業生を束ねる同窓会の力は、我が校にとっては大切である。「入学から一生涯を」は我が校のモットーであり、教職員と卒業生が一生涯を通じて響き合える絆は本校教育の根幹をなすものであり重要視したい。

③ 花いっぱい運動

松本で始まった花いっぱい運動は、本学園創立者で初代理事長の故土手内頼人氏が頭書から関わりを持ち、熱心な取り組みは大きな運動の推進力となり地域社会に影響力を及ぼした。学校の教育理念と相通じることもあり、花壇の管理や助言、さらにはフラワーコンテスト、花壇コンクール等各種審査員の派遣等今でも積極的に関わりを保ってきた。松本の地に根を下ろす本校が、松本から全国へさらに世界にまで発展してきたこの運動を大切にしながら幅広く環境問題にまで発展している活動を地域に開かれた学校づくりの意味からもさらに大切にしたいと考える。

④ 松本芸術文化協会

第 2 代の理事長故土手内始男(白樹)氏が日本画を修め、美術科誕生のきっかけにもなったこともあって松本芸術文化協会の活動を支援し、芸文協の理事をはじめ各種展覧会の審査員として本校教員が積極的に関与してきた。この活動を支援することは、文化の発信基地としての本校の存在からも大切であると考えます。

(4) 広報活動

開かれた学校づくりを推進するため、日頃の活動状況を地域社会の方々に発信し理解を深めてもらう活動は、法人にとって大切な活動の一つである。限られた予算の中から効果的に情報を発信するためには、様々なメディアを的確に活用する必要がある。中でも紙媒体はラジオ・T V と違い活字として長く目に残る可能性が高いことから積極的に利用してきた。その主なものは下記の通りである。

① 学校アピール

「美術科卒業展」

MG プレス (旧タウン情報)

② 入試関係

信濃毎日新聞・市民タイムス・タウン情報

③儀礼

年賀及び暑中見舞い広告（信毎・市民タイムス・県民新聞）

④その他

ニュース記事として情報発信。

(5) 学習活動等の概要

①普通科

「国際理解」「環境科学」「生活文化」「園芸農業」4コース制

ア. 普通科の年間活動目標

- ・生徒自らが学校は有意義な場所であると自覚できる教育を展開する。
- ・楽しくわかる授業を実践し、学び合うことを味わえる集団づくりや人間関係づくりを重視する。

イ. 普通科の重点課題

- ・社会適応力を養成していく。
(挨拶・礼儀の徹底。対外学習機会の充実→ 校外活動への積極的参加)
- ・すべての生徒の基礎学力を定着させる。

ウ. 教育課程の研究、より充実した内容を模索する。

- ・園芸農業の技術・知識習得を通し、逞しい人間力・社会人力の定着。(園農)
- ・調理・服飾の専門知識・技能の習得を中心に保育・介護等家庭生活力の伸長を図る。
- ・環境保全に寄与する態度の育成。(環境)
- ・日本文化・伝統の理解と異国文化(世界)の理解。使える外国語(英語)の習得。(国際)

エ. 具現化に向けた取組み

- ・インクルーシブな学習環境における「学び合い」を実践する。「国際理解」「環境科学」「生活文化」コースの学習発表会は横から縦に学習を広げる取り組みで生徒のプレゼンテーション能力を高めると共に生徒自身の学習目標も明確にする。
- ・校外活動の活発化。外部団体との共同活動。→ 継続のものはより内容の充実へ 新規のものを開拓

②美術科

ア. 美術科の年間活動目標

困難にめげない強い心を持つ生徒の育成

イ. 期待する生徒像・理念

素描を基本に、徹底した基礎力・表現力を専門分野に生かした進路実現が出来る能力を身につけ、自ら考え行動でき、美術科生としてのプライドを持って将来社会貢献できる人材の育成

ウ. 今年度活動目標・重点課題・具現化する取組み

- ・「個」の育成・充実 ・集中力と反復力を付ける。・自分で判断できる思考力をつける。
- ・美術における基礎・基本内容を個々や全体で徹底的に理解・修得・実践でき、協働することや表現において他者理解が出来るなどコミュニケーション力をつける。・講評に相互鑑

賞を取り入れるなどして実のある振り返り学習を展開する。

エ. 将来の目標を持ち、学力向上・進路実現へ

◎学力をつける。

- ・模試の積極的実施
- ・センター試験では受験者増→受験者全員 6割を目指す→入試研究・調査・学科充実
- ・一般受験者→強い精神力を・一般受験者の卒制との両立実現サポート
- ・進路先の改革：自ら主体的に情報を取り入れる力をつける。経済的困難な生徒への対応

③福祉科

ア. 福祉科の年間活動目標

『介護福祉士の養成（資格取得の実現）』

『介護技術の習得を通して福祉の心を育成する』

『積極的にボランティア活動に参加し、地域社会に貢献する』

- ・自主的に動ける生徒（リーダー）を育成。
- ・社会に出るための基本的な生活習慣を身に着ける（マナー）。
- ・人間力を高める。
- ・国家試験に対応できる学力をつける。

イ. 結果と課題

ア) 平成 21 年介護福祉士養成指定校（新カリ）への移行し、介護福祉士の合格率もこれを境に確実に向上した。令和 3 年度は、前年に続き 4 回目の 100%合格を達成している。しかし、入学者数は伸びているとは言えない状況にあるので福祉教育及び介護福祉士養成の重要性をアピールしていくことが大切。

参考資料（現役合格率）

卒年度	入学者数	卒業者数	卒時合格数	合格率	備考	令 4. 3. 31 現
平成 15	7	6	0	0%	福祉科設置	1
平成 16	5	4	1	25%		1
平成 17	7	6	2	33%		2
平成 18	13	5	1	20%		1
平成 19	8	9	3	33%		3
平成 20	10	8	1	13%		4
平成 21	12	10	3	30%		9
平成 22	7	5	2	40%		4
平成 23	11	7	5	71%	新カリ移行	6
平成 24	18	18	10	56%		13
平成 25	13	11	11	100%		11
平成 26	21	21	16	76%		17
平成 27	14	13	13	100%		13
平成 28	17	15	14	93%		14

平成 29	9	9	8	89%		9
平成 30	17	15	13	93%	受験者 14	15
令和元年	11	7	6	89%		6
令和 2 年	10	8	6	100%	受験者 6	8
令和 3 年	7	5	5	100%	受験者 5	5
計	217	123	120	61.1%		142
新カリ以降						

④教育職員の取組み

入学してくる生徒一人一人のスタート地点は、ばらつきが大きいので分る授業・身に着く授業を展開することは、生徒一人一人のニーズに応えると共に本校のステータスを高め財政基盤を強固にすることに繋がるので、既成概念を取り払い生徒一人一人の欲求を掘り起こした指導をさらに追い求めるプロ集団として取組む。

⑤開かれた学校づくりへの取組み

ア. 地域へ出て鉢花の販売や苗の頒布、福祉科のボランティア活動・美術科の活動等を通し、学校は文化の発信基地として、地域から愛され地域から必要とされる学校づくりに努めて来ている。

イ. 公開授業 学内向け・地域社会向けにスケジュールの込み合う中で積極的に取り組んでいる。コロナ禍で永年続けて来た鉢植え講座等が中止に追い込まれたが今後もマンネリ化を防ぎ文化発信基地としての姿をさらに高めたい。

ウ. 学校評価 学外の評価委員 8 名に委嘱し、年 2 回それぞれの立場から授業及び行事・生徒会活動、生活面等について率直な意見及び評価を戴き運営に反映させている。

⑥その他

ア. 美術科の生徒数安定に繋がる効果的な対策

イ. 福祉科の生徒数安定に繋がる効果的な対策

ウ. 定期的かつ地道な中学校訪問。

中学生の実態情報の把握により効率の良いアピールを実施。

エ. 公開講座・学校説明会・中学校訪問・出張授業の充実と結果報告・分析

オ. 卒業生の進路追跡調査と紹介・学内展示の充実